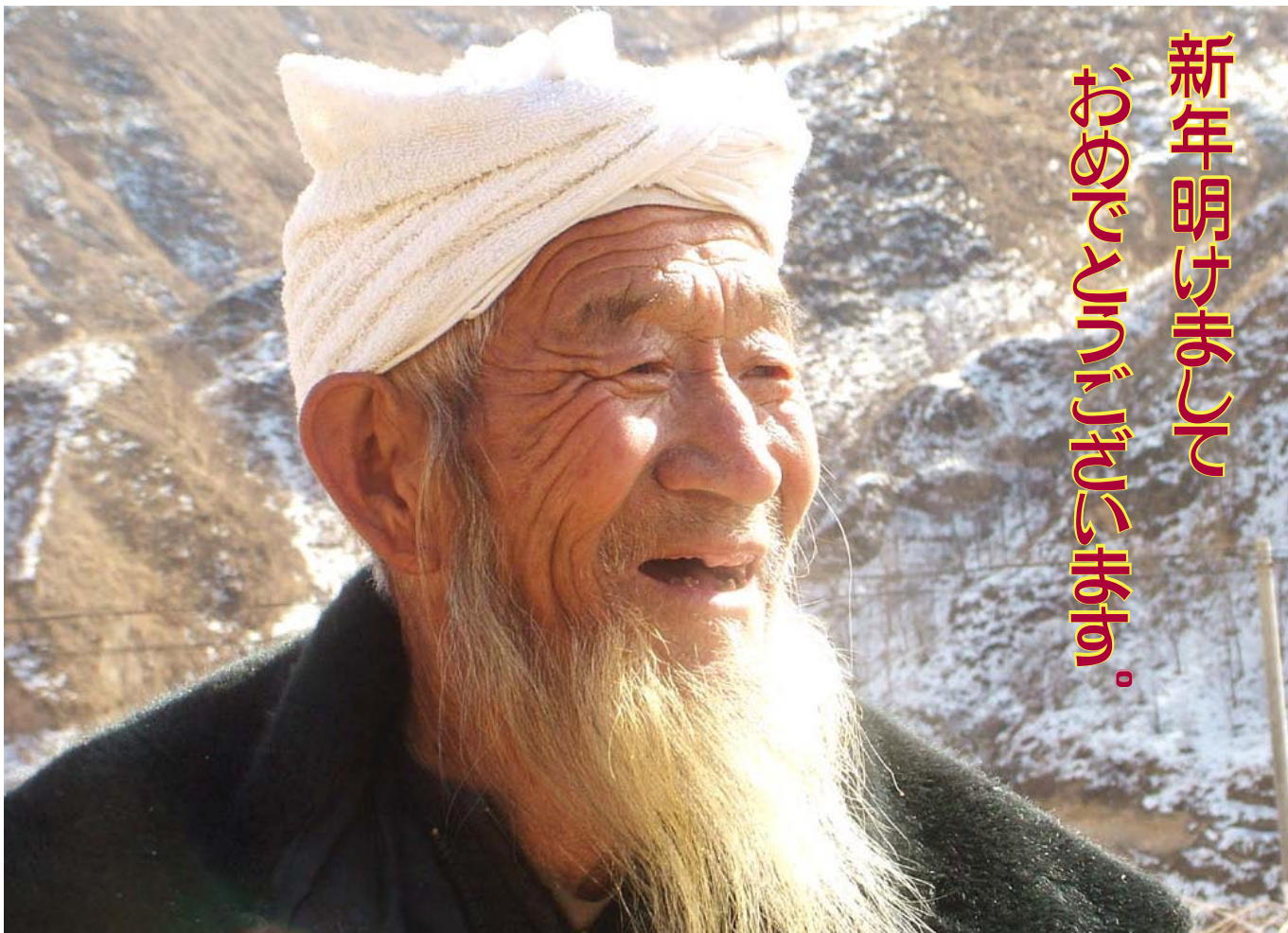




120号
2007 /1/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



新年明けまして
おめでとう！

腰鼓の老名手 中国陝西省安塞県で 2006年春節 撮影：周路

‘わんりい’120号の主な目次

北京雑感その⑪「北京の公園で」	2
媛媛来信⑩「お籠様の祭」	3
「陝北女娃」⑪(翻 翻)	4
「陝北女娃」⑫(盼 盼)	5
呉音の伝来	6
私の四川省 一人旅②(成都に戻るバスは・・・)	8
ぼくが見て感じたスリランカ④「コロンボで1日…」	10
私の調べた四字熟語⑨「糟糠の妻」	11
ラオス山からだよりⅨ	12
松本杏花さんの俳句集「拈花微笑」より	13
中国を読む⑩「新東洋事情」	14
中国新春展の紹介	15
‘わんりい’掲示板	16

♪♪ ‘わんりい’の新年会で歌います！♪♪

「中国語で歌おう！会」メンバーと一緒に練習しよう！

中国語版「北国の春」指導：趙鳳英

(オリジナル曲の作詞：いではく 作曲：遠藤実)

於：まちだ中央公民館7F・ホール

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

1月26日(金) 19:00 ~ 20:30

「北国の春」は、中国の人が中国の歌かと思っている、いまだ人気の歌です。この際、しっかり覚えて中国で披露しよう！体験参加無料です。録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう！会」於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催 19:00 ~ 20:30

会費(月1回)：1,500円 体験無料

会場、日時など事前に下記事務局へお問合せ下さい。

TEL 042-734-5100

北京の公園は、市内のあちこちに、規模の大きなものが散らばっていて、市民は有効に利用しています。特に60歳以上の老人は、年間70元ほど払うと、好きな公園を10箇所選んで、自由に入園出来るパスが貰えます。頤和園とか香山公園も選ぶことが出来、頤和園などは、入園料が高いので、このパスは、非常な割安感を得ることが出来ます。北京の退職した老人達は、家の近くの公園へ毎朝行って、散歩をしたり、京劇やダンス、コーラス等自分の好きな活動に参加したりして、楽しく生活しています。

私が住んでいた所に近い紫竹院公園は、以前は朝7時前に入園すれば、誰でも無料でしたが、現在は何時でも無料なので、夜も、仕事を終えた人たちが加わって、散歩とサークル活動で更に賑わいます。

日本と違って、所謂公民館のような施設が少なく、種々の活動を、公園や、街角のちょっとした広場等野外で実施するので、目に付き易いせいか、老人の活動が随分活発だと印象を受けます。公園以外でも、入場料を必要とするところでは、どこも老人割引があって、身分証を見せれば半額で入場することが出来るのです。

今70歳前後の人々は、何十年と、同じ職場で働き続け、退職した人たちが殆どですから、以前の職場との結びつきは、日本では想像も出来ないくらい強いものがあります。

退職後、何十年経っても、昔の職場が、年二回程慰労集会のようなものを催して、豪華商品の当る福引を行ったり、日本の盆暮れに当る時期には、油や日常の食品を届けたりして、OBの面倒を見ている。給与は、退職時の給与に比例して、一定割合の額が毎月、銀行口座に振り込まれます。この金額は、決して多くはありませんが、物価が安いので、贅沢をしなれば、まずまず暮らしていける額です。私などは、個人的にみて、とても羨ましく感じっていますが、これも、昔の職場が存続し、それなりの利益を上げている場合に限られるようです。

中国の経済発展が進む中で、昔の国営企業が破綻したり、民間に移行して、経営母体が変わったりすると、様子が違ってきます。退職者給与は出るにしても、年2回のボーナスに当る現物支給は、全く無かったり、あってもほんの僅かだったり、現在の職場の収益力が大きく係わってきます。これなどは、本人の意思や努力に関係なく、時代の流れによって引き起こされたものですが、生活をする上では、格差となって現れます。

今までは、職場がずっと存続し、そこに働く人も退職

するまで同じと言う状況だったので、以前の職場による慰労会や生活用品の支給などが行われていましたが、これからは、職場の消長が激しく、働く人もあちこちに移動する世の中になって、今までのような制度は維持できなくなるでしょう。現在の労働環境で、退職後に、どのような福利厚生が実施されるのか知るチャンスはまだありませんが、今までとは随分違ったシステムになるのではないのでしょうか。

退職者だけではなく、現役で働く人たちの間でも、格差が大きくなっています。中国の経済は随分発展しているのにと、ちょっと不思議に思うのですが、失業者もかなりいるようです。それで、大学生が学校を卒業しても就職できないケースが多発しています。

先日、新聞に、北京大学の大学院を卒業した人が、餃子売っているというニュースが出ていました。専門が何かとか、詳しい状況は伝えていませんでしたが、仕事の選り好みをしたわけではないのに、就職先が見つからず、仕方が無いので餃子売っているとのことでした。

これは、北京大学の修士が餃子売っていると言う、極端な組み合わせで、ニュースになりましたけれど、大学を卒業して就職できない若者が大勢いるのは紛れもない事実です。別の日には、専門学校の卒業を間近に控えた女子学生が、就職先は決まらないし、親の期待は大きいので、悩んだ末に自殺したと言うニュースを伝えていました。学生の就職難は、かなり深刻なようです。

昔、中国では各地の優秀な学生が、中央に集められて、国費で勉強して、社会のエリートとして活躍しましたが、現在は、生活水準の向上に伴って、親の経済力で進学する子供が増え、受け入れる大学も増えたので、大学生も玉石混交、卒業生の数が増えても、就職先が少なく、この様に深刻な事態を招いたのでしょうか。

どうしてこんな深刻な話になってしまったかと言うと、先日、昼食の後で、昼間の公園を歩いた時に、水辺や木陰のベンチに若い人が座っているのを見かけたせいなのです。私は、サラリーマンが、仕事の合間に休んでいるのかと思ったのですが、中国の友人は、この人々は仕事が無いのでここにいるのだと教えてくれました。それで、新聞で見た時にはピンと来なかった失業問題が急に眼に見えて来たのです。

広々とした明るい公園と、失業者との取り合わせは意外でしたが、これも中国の現状の一側面なのだと納得しました。これからは、中国の社会変化にも注目して行きましょう。

日本はもうお正月を迎えました。中国ではお正月は旧暦で迎えますが、2007年のお正月はちょっと遅くて、二月の十八日が元日になります。

中国も間もなく旧暦の12月を迎えますが、12月になりますとお正月を迎えるための行事がいろいろ執り行われ、迎春の雰囲気の日増しに濃くなって来ます。それらの行事の中でも12月23日の「竈様のお祭」は人々に良く知られています。

「お竈様」とは、玉皇大帝^{注1)}によって「九天東厨司命竈王府君」と封じられ、各家の吉凶禍福を司ると共に竈を管理するという中国の伝説上の神様です。家々の保護神として、殆どの家で「お竈様」のお札や絵に描かれた「お竈様」を台所に祀り、人々の崇拝を受けて来ました。

「お竈様の祭」は中国では「祭竈」或いは「送竈」と呼ばれています。

お竈様は、前年の大晦日から、それぞれの家に一年間にわたって住み、家の安全と家族の行動を監視します。そして、お竈様は年に一度、旧暦の12月23日に、に天に戻り、自分が住み着いた家の善行と悪行を玉皇大帝に報告するのです。

玉皇大帝は、その報告を聞いて判定を下し、その家が来年に得るべき吉凶禍福をお竈様に託して大晦日に元の家に帰らせ、新しい一年の仕事を続けてやらせます。ですからそれぞれの家にとってお竈様がどんな報告をするか深い関心があります。そんな訳で、旧暦の12月23日に行う「送竈」と大晦日の「迎竈」はずっと昔から人々の大切な行事でした。

昔、「送竈日」の儀式は、所によって違いがありますが、普通は台所に祀ってあるお竈様のお札の前に「麻飴」(胡麻で作った飴)や、竹か紙で作った馬と馬の餌を供え、線香を立てて丁寧に拝み、その後飴をお竈様の口に塗り、「悪い話を話さないで、良い話を話してね」などと願いごとを言います。お竈様への礼拝を終わらせると、画像や馬などを焼いて天に送ります。

現在でも中国の北方では12月23日「麻糖」を食べ、南方では、もち米団子を食べるといった習慣があります。いずれもねばねばした甘い食材で作られたものです。「お竈様」に甘いものや粘り強いものを食べさせて、わが家の悪口を神様に告げないよう、よい話をしてもらえようとの思いを込めるのだそうです。

実は「祭竈」の起源は大変古いのです。古書の「礼記

礼器」に、「祭竈」という文字が見られ、周代(紀元前1046年頃～紀元前256年)には正式な祭事としてとり行われていたそうです。

唐代、宋代は、祭竈の供え物は特に豊かだったと言われており、宋の詩人・范成大が著した《祭竈詞》に、民間の竈祭りを行う風景を覗き見ることができます。

また、1930年代の中国の文豪である魯迅先生も次の《庚子送灶即事》という詩を残し、貧しい家が竈神を祭る情景を描きました。

「隻雞膠牙糖^{注2)}，典衣供瓣香。家中無長物，豈獨少黃羊(鶏一羽と膠牙糖と香を供えて竈の神を送る。供物は着物を質入れして調えた。わが家に余裕は全くなく、黄羊^{注3)}がないばかりかなにもない)」(魯迅全集/訳者：佐藤保)



▶注

- 1) 玉皇大帝：中国の道教の伝説中にある神々の最高リーダーです。
- 2) 膠牙糖：佐藤保氏の訳文中にある膠牙糖は、中国では「麻糖」と呼ばれ、胡麻、砂糖、大麦、もち米などで作られたべたべたする飴のこと。
- 3) 黄羊：中国の西北部の山に棲息している羊の一種。

何 媛媛

中国山西大学外国語学部日本語学科を専攻し卒業する。2002年来日。現在は大学の中国語講師を務める傍ら、地域の国際交流やボランティア活動などに積極的に参加している。

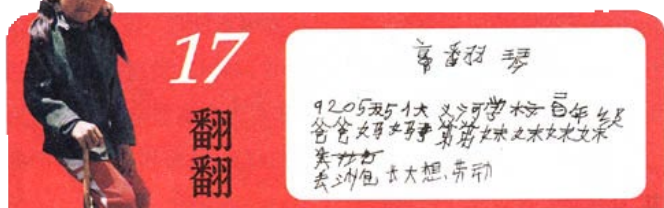
8年前から、趣味で中国の古箏を弾きはじめ、中国古箏のアマチュア最高級試験に合格。自宅で古箏教室も設けている。

tel:042-735-3984 E-mail: kakoushinjp@yahoo.co.jp

3年という長きにわたって「わんりい」紙上で中国の伝統的なお祭や風習を紹介頂きました何媛媛さんの連載がしばらくお休みになります。

何さんの文章によって、私達は中国の方たち考え方感じ方なども知り、何さんの文章が果たした意義はとても大きいと感じています。

外国語である日本語で、毎月、資料を調べ、長文の文章を寄稿くださる努力は並大抵のことではなかったでしょう。改めて深くお礼を申しあげると共に、できるだけ早い機会に再開していただければと祈っています。(田井)



2000年2月のぼかぼか陽気のある日、黄河の砂州にある伏羲河村の村人達が、くずれ落ちた窑洞の前に集まっていました。老人達がカルタをしており、新しい衣装の女の子達何人かが取り囲んで見えています。私がやってきたので、すぐに彼女達の関心が私に集まりました。しかし私が写真を撮ろうと写真機を構えると、背筋を伸ばして、妙に取り澄ましてしまいます。自然で生き生きとした感情が溢れている写真が本当は一番いいのですけれど。

私はカメラのレンズを覗きながら写真に撮りたい対象を探し求めていると、杖を突いた女の子が塀に寄りかかって座って居るのに気が付きました。ずうっと頭を垂れて、しかもどんどん深く俯いて行きます。この子の名前は郭翻琴といい、みんな彼女を翻翻と呼んでいるそうです。杖を突き頭を深く垂れた翻翻は、私の心の中で気にかかる存在になりました。

次の年の8月、私は女の子達にアンケートを書いてもらおうと伏羲河村にやってきました。辛い気持ちにさせられたのは翻翻の楽しみは“丢沙包”¹⁾だけということ



翻翻とお祖父さん

です。“丢沙包”は彼女が他の子どもたちと一緒に遊ぶことの出来る唯一の遊びなのです。将来の理想について、“大きくなったら仕事をする”と書きました。小さい頃から体が不自由なこの子は大きくなったら正常な人と同じように仕事をし、自分の力で生きることが出来るようになるかとひたすら願っているのです。が、これは現実にはありえない辛い夢物語でしかあり得ません。

ある時、そろそろ夕方になろうかという頃、私は伏羲河村に着き、楽しそうな笑い声につられて学校にやってきましたと、狭い校庭で子供たちが手を繋いで“老鹰捉小鸡”²⁾という遊びをしていました。黄色い服の少女が壁に寄りかかっていたのですが、(この遊びを)羨ましそうに見ている彼女の眼差しに私は深く打たれました。翻翻でした。翻翻はこのような遊びにはいけません参加することは出来ないのです。

伏羲河村に来る都度、私はいつも翻翻の写真の撮るのですが、写真を撮ろうとすると杖を自分の後ろに隠そ



2006年春節の翻翻



翻翻と弟

うとしますので、私は自分の前に抱えるようにといたします。いつか分からないけど、心優しい人がこの可愛いそして可哀相な女の子の写真を見て、彼女を助ける方法を考えてくれるかもしれないと思っているのです。実はこの種の矯正手術は町に行けば難しい手術ではありませんし、費用もそれほど高くはないのです。しかし、この地の人にとっては、翻翻の家にとっては手が届かない金額でどうしようもないことなのです。

その後再び伏羲河村にやって来たときは私が写真を撮り続けた何人かの女の子達は皆、郷の学校に行ってお家に帰っておらず³⁾、家に居たのは翻翻だけでした。本来なら彼女も四年生になっているはずですが、山を越

え谷を越えて40里あまりの道を歩いて郷の小学校に通うのは、翻翻にとってはやっぱりどうしようもないことなのです。
(田井訳)

注1) 2人の子どもAとBが8～10mの距離を置いて向かい合い、もう1人の子どもCが真ん中に立つ。両サイドの子どもAとBは真ん中に立つ子どもCに砂袋を投げつける。Cが上手くよけたらA又はBは砂袋を拾って更にCに投げ、Cに当たったら位置を変える。翻翻は足が悪いがA又はBとして砂袋を投げることはできる

注2) 日本の子供たちの遊びの“子とろ、子とろ”と同じ遊び。

注3) 4年生になると宿舍のある遠方の学校で勉強し、週末に自宅に戻る。

黄土高原来信・第二部「shǎn běi nǚ wá 陕北女娃 [18]」……pàn pàn 盼盼

zhōu lù 周路



私が受けた盼盼の第一印象はまさに典型的な陕北の少女といったものでした。初めて出会ったその日は、万物が蘇り、柳の枝が芽吹き始めた早春の季節で、生気がいたるところ満ち溢れていました。安塞の竜泉村のはずれで、女の子が2人、石の碾き臼に座って何かひそひそと話していました。丸顔の女の子が乱れた髪の毛が被さった目で私を見つけ、私が他所から来た人間だと分かったようでした。この子は赤い林檎を手にしてとても可愛らしかったのです。私は、石臼の辺りや崩れた窑洞の前で彼女達の写真を何枚か撮りました。

私が村を去ろうとしてふと気が付くとこの子が後を付いてきています。私が振り返ったのを見ると女の子が言いました。「写真送ってもらえるの？」私は少しビックリしました。初めて自分から写真がほしいという子に出会ったのです。私は原則として撮った写真は全部、子供たちに上げることにしていました。この広い空の下で私達はきっと縁があるのでしょうか。私は直ぐに答えました。「大丈夫。次に来る時はきっと持ってきてあげるよ。」女の子は嬉しそうに手を振ってくれました。

同年8月中旬、私は再び竜泉村にやってきました。あちこち捜し回って、やっと村の子どもの案内で村はずれの黄河の砂洲に下り立ちました。牛の見張りをしている子供たちの中に、盼盼という女の子を見つけました。ほかの子同様牛の番をしており、しかも、3、4頭の牛の番をしていました。着ている服装が前回とは全く異なっていましたので暫くじっと見て、やっとこの子が春に知り合った女の子に違いないと分かりました。小さく



なった衣服に汚れた上着を着、髪の毛はぼさぼさで直ぐには分からなかったのです。

けれども盼盼の文字は角ばった、とても整ったものでした。確かに誤字と当て字があるものの当地の三年生の中では比較的よい水準といえるでしょう。盼盼の夢は大きくなったら、歌手のスターになりたいとのこと。小さいながら志の高い子です。私は、盼盼が自分の夢を実現させられるかずうっと気に掛けているのです。

(田井訳)

中国の言葉が日本に最も早く伝来したのは「呉」の国の言葉で、呉音として現在でも使われています。何時どのように伝来したかは諸説有り確たるものはありません。中国の書物に記載されている一つの可能性の高い説をここで紹介したいと思います。即ち、呉越の争いとの関係があるという説です。

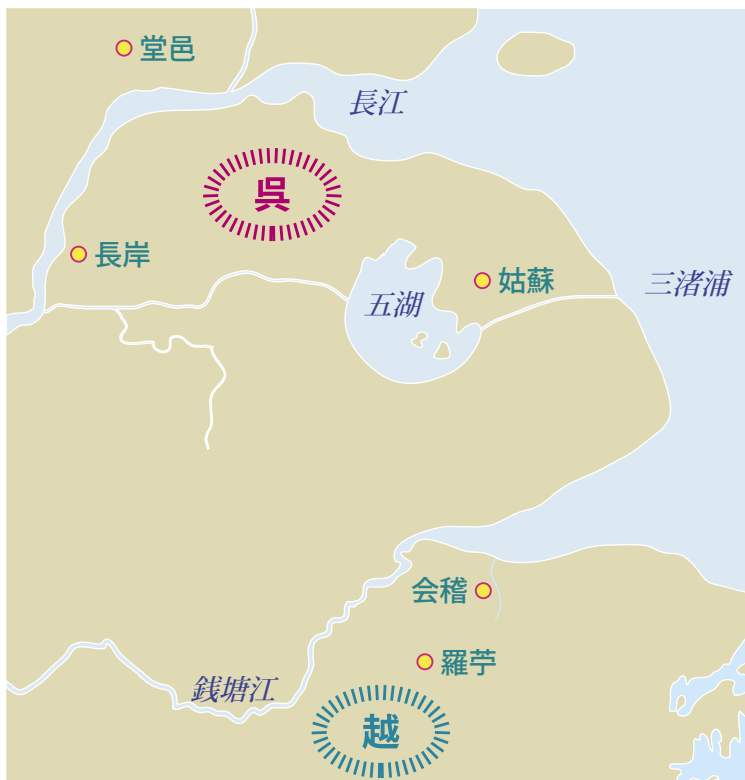
呉は周王朝の流れを汲み、周の本来正統な継承者太伯が建国したもので、太伯は父王の意向を汲みみずから南に向かい入れ墨をして周には終生帰らない意思を内外に示しました。彼の人格に惹かれて多くの人が付き従ったといえます。

越との問題はその子孫の鬪閭こうりよの時に発生します。越との小競り合いで鬪閭が傷つきその怪我のため、鬪閭が死亡してしまいます。その跡を継いだ夫差ふさは敵を討つべく越との戦をしかけ、勝利します。

越王勾踐こうせんは会稽で屈辱的な降伏を強いられます。勾踐は臥薪嘗胆がしんしょうたん（嘗胆：毎朝苦い熊の肝を舐めるという意）し、呉への復讐の機会を狙うことになります。また勾踐は自分の部屋に入ってくる部下に「汝は会稽の恥を忘れたるか」と言わせ「いえ決して忘れておりませぬ」と答え、復讐の気持ちを片時も忘れぬようにしたと言います。

越の宰相である策士・范蠡はんらいは密偵を放ち、逐一呉の情報をつかむとともに、絶世の美女・西施せいしを呉王・夫差に献上し、呉の属国となった越に対する夫差の注意を極力そらすようしむけます。

西施は中国四大美人の一人で「西施の鬢ひそみに倣ならう」という言葉が出来たほどの美人です。西施が心臓の病のため苦しげに眉をひそめたのが、また色気があって一段と美しかった、それを皆でまねをしたというのです。中国語では「効西施之鬢」といいます。また猫も杓子もそのまね



(注) 呉は長江(揚子江)の南に位置する。五湖は現在の太湖、姑蘇は蘇州、钱塘江(せんとうこう)は年一回海の水が津波のように押し寄せるので有名な川。地図は「呉越絃外」より引用改変。

をしたのを冷やかす意味で「東施効顰」という言葉もあります。

日本では呉の夫差が父の敵を討つため臥薪をし、越の勾踐が嘗胆したといわれていますが、左下の挿絵にあるように臥薪嘗胆したのは勾踐なのです。日本で面白おかしく脚色したのではないのでしょうか。呉と越とではもともと国としての格の違いがあり、また国力の差があり、呉の夫差は臥薪する必要はなかったと思われます。

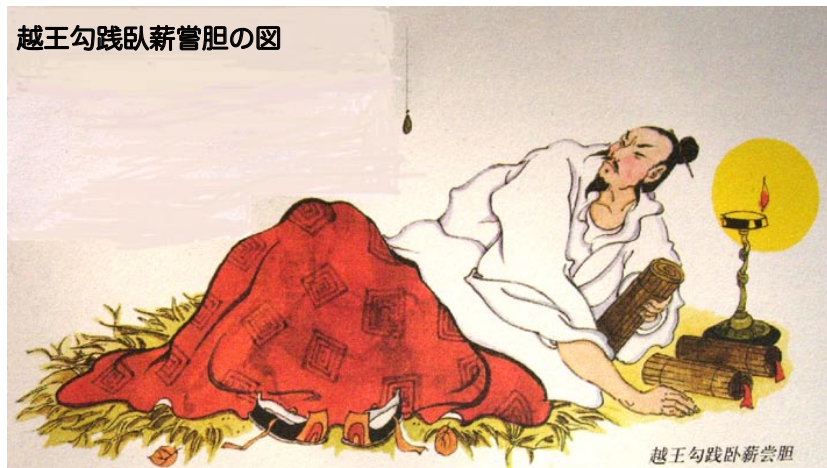
夫差にとって越は眼中になくなり、中原の覇者たらんことを望み中原に進んで呉を留守にした隙を勾踐と范蠡につかれます。姑蘇城外の干隧での最後の戦いに敗れ、

夫差は庶民として暮らしたいと、勾踐に命乞いをします。勾踐は以前に夫差に命を助けられたこともあるので許そうとしますが范蠡がそれを許しません。「あなたはまた呉と同じ過ちを犯そうとするのですか」と勾踐に諫言し、B.C.473年夫差は自害をして果てます。

ここに呉は滅亡してしまいます。

地図でわかるとおり北は揚子江(長江) 東は海です。逃げ場を失った人たちは「海に逃れて、日本に来たのではないか」という説も

越王勾踐臥薪嘗胆の図



越王勾踐臥薪嘗胆

「中国通史」より引用しました。

あるのです。魏志倭人伝のもととなる書物に倭人は「太伯の後也」とみずから名乗ったとあります。「後」は後裔の意味です。また魏の国のあと三国を統一した晋の「晋書」や梁の国の「梁書」にも同じ記述があります。この時点で呉の人たちが日本に渡ってきたのではないか、呉の言葉や水稲、蚕、衣服その他の習慣や技術を持ち込んだのではないかと思われるのです。日本では和服屋というべきところをいまだに「呉服屋」と呼んでいますし、「呉」姓があるのもその証左ではなからうかと思われま

す。秦の始皇帝の命を受けて徐福が不老長寿の仙薬を求めて日本に来たという説もあります。そのときに呉の国の地域から出発したので呉の言葉が日本に伝来したということも考えられます。この説をとれば前説よりも250年後のことになります。いずれにせよ呉の言葉が日本に伝来したのはかなり早い時期だったのではないのでしょうか。

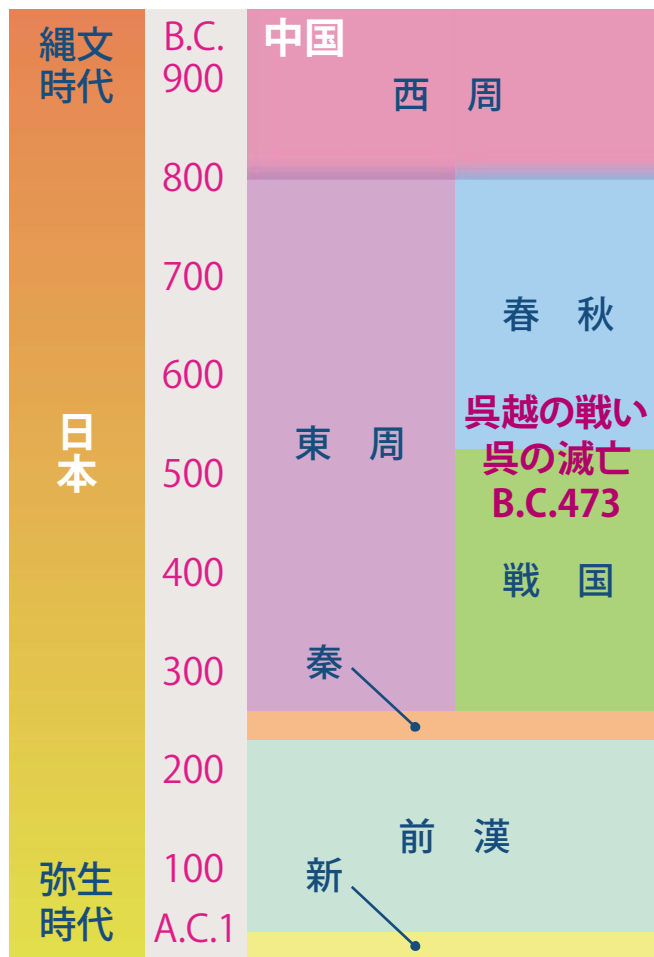
■ 呉越の戦い裏話

呉越の戦いの真の主演は呉国の宰相・伍子胥と越の宰相・范蠡だということも出来ます。

伍子胥は楚の名門に生まれましたが、父が政敵に殺され呉に逃れ、呉王・闔閭につかえ、楚に復讐の機会をうかがっていました。十数年の後、楚を破り宿願を果たしました。闔閭が越との戦いで傷つき亡くなった後は、夫差をたすけ、越への報復を果たします。会稽で越王・勾践を破り、この機会に勾践を亡き者にしようと主張しましたが入れられず、越が呉の属国となった後も常に越に注意するようにと夫差に進言しましたが、これも入れられませんでした。

しつこく言い過ぎて夫差にきらわれ、逆に謀反の罪をきせられて自害する羽目に追い込まれてしまいます。死に臨んで伍子胥は「我が目をえぐって呉の東門に掲げよ、やがて越が呉を滅ぼすであろう、その有様をこの目で見届けたい」といって死んだといひます。夫差は呉に破れ、自害するに際して「伍子胥に会わせる顔がない」と言って顔を布で覆って自害したといひます。

一方勾践につかえた范蠡は、越が呉に復讐を遂げた際、夫差の助命嘆願を拒絶すべきであると主張し、呉を完全に滅ぼすとさっさと勾践の元を離れています。彼は「狗は追うべき兎がいる間は大事にされるが、兎がいなくなると煮られる運命にある」というのです。また勾践は苦勞は一緒に出来ても猜疑心が強く楽しみを一緒に出来る人物ではないと考えたようです。後になって、陶の地に陶朱公といわれる大富豪が現れましたがこれは交易によって莫大な富を築き上げた范蠡の亡命の後の姿であったと



日本・中国年表

いわれます。

伍子胥と范蠡、呉越の戦いの二人の実質的な主人公のこの対照的な生き様、処世術と結末は呉越の結末とともに明暗が鮮明に分かれています。

ホームページ：<http://www.k-okamura.com/>
 ブログ：<http://blog.drecom.jp/guangcun/>

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い
 年会費：1500円 入会金なし
 郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100（事務局）

回教寺院を出ると、バスの通り道になっている街角に向かった。

広東兄妹と桂林女子が乗るバスは6時半に川主寺を出て、およそ15分後に松藩の街を通過する。それまでに路上に立ってヒッチハイクしながらバスを呼び止めなければ、昨日チケットを買っておいた成都行きのバスに乗りそびれてしまうのだ。

私達はちょっと早めにバスが通過するというポイントに立ち、他の車よりひときわ大きいバスの影が道路の向こうに見えてくる度に、皆でいっせいに手を振って呼び止めた。

何台かのバスをやり過ごした後ついに成都行きのバスが来た。バスの車掌がチケットを確認すると早く乗るよう合図する。皆が行ってしまえば私は一人きりだ。心細さと寂しさを感じている私の気持ちを察したかのように、広東兄が車掌に私も一緒に乗せてくれるようにと交渉してくれたが、満席だからダメだと取り付くシマもない。

仕方ない。これくらいでビビっているようじゃ、これから先ずっと一人で旅する事なんてできやしない。「私は大丈夫だからいいよ～、先に行って下さい。」広東兄にお礼を言い、みんなと握手して別れた。彼らに会えたおかげで松藩には忘れられない思い出ができた。みんなありがとう!! またいつか絶対に会おうね～!! 去っていくバスに手を振ると、急に一人ぼっちだ。武者震いがでた…。と思ったら、それは武者奮いではなく寒さによる震えであった。高度の高い松藩の朝は結構寒い。私のバス、早く来ないかな～。川主寺の方向を見つめてバスを待った。

・・・が、バスは来なかった。待っても待っても来なかった。私のバスは7時に川主寺を出るのだから、7時15分くらいにはその道を通る筈なのに、30分になっても、40分になってもバスは来なかった。

「????」

私は途方に暮れかけていた。もう一時間以上も道路に立ってバスが来るたびに手を振り続けているのに。そばに停まっていた車の運転手が見咎めて、車から降りてきた。「君は何をしているの?」

人の良さそうなお兄さんだった。事情を説明すると「7時のバスならとくに通過してる時間だよ。君のバスはもう行っちゃったんだよ」と言う。「絶対そんな筈無いよ! 私は6時半からここに立ってるんだから!」私はムキになって言い返した。「とにかくもうちょっと待ってみる!」

彼は、「じゃあ好きにすれば」というような顔をして車に戻っていった。だが、バスは来ない。とうとう8時を回ってしまった。先ほどのお兄さんが見かねたように再び車

から降りてくると、「僕の車に乗りなよ」と言ってきた。「こんな時間まで、バスが来ないなんてありえない。とにかく川主寺のバスターミナルまで行ってみよう。そうすればバスがどうなってるのか分かるから。」

さすがに少し諦め気分になりかけていた私は、今度は素直にうなずいた。知らない土地で、知らない人の車になんて乗っちゃっていいのかなあという気持ちも無いでは無かったが、お兄さんの目に下心の影はまったく感じられなかったし、そんな心配は杞憂だった事がすぐに判明した。道路を走っていると所々で道に立っている人が手を上げ車に乗り込んできて、お兄さんにお金を払っている。皆も川主寺に行くらしかった。そうか、このお兄さんは乗り合いタクシーの運転手なんだ。安心すると同時に急にお兄さんに親しみの気持ちが湧いてきた。心配してくれてありがとう。

「バスターミナルの窓口に行って事情を聞こう。もし君のバスが松藩で停まらずに行ってしまったのなら、バスのチケット代を返すように僕が話してあげるから」

お兄さんの親切な言葉を聞いているうちに、だんだんバスの事はどうでも良いような気分になってきた。バスが来なかったおかげで、またこんな親切な人に出会う事ができた。その事の方がスムーズに成都に帰れる事よりも嬉しい出来事に思えてきたからだ。気ままな一人旅の身の上で、今日中に成都に戻れなかったからといってどうという事はないのだ。それよりも窓の外を流れる松藩の景色はとても綺麗だし、昨日泊まった可愛い民宿で、もう一日ゆっくり過ごしても良いような気がして来ていた。さっきの不安は何処へやら、お兄さんのおかげですっかり気分が良くなっていたが、彼は私の気持ちの変化などまったく意に介さず、カセットから流れてくる歌謡曲を口ずさんでいた。



川主寺に着くとお兄さんは私を伴って窓口まで行ってくれた。

「彼女はチケットを買って待っていたのに、バスが止まらなかったんだ」

「チケット買ったとき、ちゃんと松藩から乗るって言うておかなかったからよ!」

係りの女性職員はいきなりケンカ腰だ。

「言っておいたよ!」

「私は知らないわ!」

口論が始まりそうになったところで、職員がもう一度チケットを見直すと、急に口調を変えて何か言い、お兄さんは私を促して窓口から離れると再び車に乗った。

「…？」

バスターミナルの裏手に回り車庫まで行くと、そこに一台のバスが止まっていた。

「君のバスだよ」

「え？」

なんと私が松藩の路上で待ち続けたバスは、故障の為まだ発車しておらず、乗客を乗せたまま整備中との事なのだった。

まったくなんて事なんだ。私をからかう為に松藩の様子が仕組んだのか？思わず大声で笑ってしまった。お兄さん、連れてきてくれてありがとう。もし彼がここまで連れてきてくれなかったら、私はあのまま釈然としない気分でバスを諦め、もう一日松藩か川主寺で過ごす事になったのだろう。両手でお兄さんの手を取ってお礼を言った。「良かったね、気をつけて」

彼は恩着せがましいことも言わず、爽やかに去っていった。後ろ姿に思わず見とれてしまった。トラブル転じて、また一つ松藩での素敵な思い出ができた。



発車時刻を2時間も過ぎた修理中のバスに、タクシーで乗り付け意気揚々と乗り込んできた私を他の乗客達は訝しげに見つめていた。私の席にはまたしても先客が座っていたが、後部座席にはいくつか空席があったのでそちらに座り、上機嫌だった私は聞かれもしないのに周りのおじさん達に朝のいきさつを話して聞かせた。遅れて乗り込んできた変な女がおっちょこちょいの外国人旅行者だと判るとおじさん達も笑いながら私の話を聞いてくれ、和気あいあいとした雰囲気の中に故障も直り、間もなくバスが発車した。あ～、これで無事に成都に帰れる。

ところがである。松藩を通り過ぎて少したった頃、新たな乗客がバスに乗り込んできた。空いていた空席はすべて埋まってしまい、私の座っていた場所にもバスチケットの座席番号を指し示しながら、ここは自分の席だと主張する乗客が現れた。仕方なく席を立つと、もう私の座る場所は残されていない。

仕方ない、それなら私も…と、自分の座席番号が記載されているチケットを取り出して本来の私の場所に座っていた女の子にここは私の席だから変わって下さいと言うと、彼女も「私だってちゃんとお金を払ってこの場所のチケットを買ったのよ！」と主張する。彼女の言い分を聞くと、どうやらバスの発車時刻になっても私が乗っていなかった為、車掌が空席だと判断して新たにバスチケットを発券してしまったらしいのだ。オーバーブッキングである。あぶない、あぶない。これじゃ松藩の路上で待っていたってちゃんとバスに乗れたか判ったもんじゃない。

しかしこうなってしまうと、先に彼女に座られてしまっ

ている私の状況は不利なのだった。残っているのは運転席の脇の肘掛も背もたれもない補助椅子だけである。そこから成都まではまだ10時間近くもバスに乗っていないし、昨夜は広東兄弟や桂林女史と遅くまで遊んでロクに寝ていないからとっても眠い。ハッキリ言って補助席は絶対嫌だ～！と思ったその時、「日本小姐の方が先にチケットを買っているんだから、そこは彼女の場所だ！あんた席を譲ってやんな！」という力強い援護射撃が飛んできた。先ほどまで談笑していた後部座席のおじさん達だ。悔しそうに席を立つとドア脇の補助席に移っていった彼女には気の毒だったが、背に腹はかえられない。

ラッキー!! おじさん達有難う～！後部座席にお礼のピースサインを飛ばして自分の席に腰掛ける。今度こそ、やれやれだ～。いろいろあった朝だったけど、結局すごく楽しかった。終わりよければ全て良しだ。

でもやっぱり少し気がとがめたので、途中の休憩所でりんごを買って、席を替わってくれた女の子に半分あげた。女の子はビックリしたような顔で受け取ると、ニコッと笑って「謝謝」と言った。どうやら大丈夫そうだ。そんなに怒ってなかったみたい。ホッとしたら嬉しくなった。

今回の小旅行の目的は九寨溝と黄龍の観光だったが、それよりも旅の道中で出会った多くの中国人との小さな交流の方がより強く心に残る物になってしまった。四娘姑山に行った時もそうだったのだが、結局私は人が好きなのだ。異国の人と国籍や文化を越えて少しでも心が触れ合える事が、私にとっては 何を見た、何をした、という事柄を大きく越える喜びを感じさせてくれる。それにしてもどうだろう。ちょっと身構えるような気持ちで中国に一人残った私だが、嫌な思いなんて何一つしない。この旅で会える中国人はみんな明るくて優しい人ばかり。

四川省って最高だ～。きっとこれからも素晴らしく楽しい事がたくさん待っていそう。成都にもどって既に発給されている筈のピザを受け取りに行けば、いよいよ本命のチベットエリアに向けて旅立てる。成都に向かうバスの中で、私は今回の小旅行の成功と今後の旅への期待で胸をいっぱいにしてた。



松藩の宿のお祖母ちゃんが刺繍していた靴の中敷

コロンボで一日時間が余ったら…?

スリランカを訪れる殆どの方は文化の三角地帯やキャンディ、ヌワラエリヤ、ゴール等の有名観光地に行かれる事と思います。

仏教遺跡や植民地時代の面影はこれらの観光地で見てもらうとして、コロンボでは地元の人々の生活ぶりを見るコースをご紹介しますと思います。移動には三輪タクシーを使うのも良いのですが、現地の習慣に慣れていない方が短時間でコロンボを見る為には、運転手との値段交渉に時間を費やしたり、支払時にトラブルに巻き込まれて不必要な時間を使ったうえにスリランカの印象を悪くするぐらいならばホテルリムジンやタクシーを使った方が良いでしょう。この手のトラブルをこよなく愛される方は、運転手との丁々発止を楽しむのもスリランカの良い思い出になるでしょう。

早起きが得意な人は朝食までの時間を利用してインディペンデンスホールに行きましょう。ここでは多くの人がジョギングをしている姿を見ることが出来ます。ご夫婦で、仲間同士で各々のスピードでホールの周りを走ったり歩いたりしていますから、この人達に混ざってホールを回ってみて下さい。

早朝の運動が苦手な方はコロンボ港の前にある中央市場1階にある魚市場も面白いですよ。築地と同じ様な光景を見る事ができます。平日であれば、ホテルへの帰路にフォートの鉄道駅に寄って通勤客の様子を見ましょう。駅からあふれ出てくる人達をみているとスリランカの人達の活力を感じられます。

朝食後にはコルピティヤのマーケットに行きましょう。4階建ての建物にあらゆる食材が揃っています。在留日本人の奥様たちも多く利用する場所で、狭い建物の中には怪しげな日本語を操る店員のいる八百屋さん、果物屋さん、魚屋さん、肉屋さん、日本食等の輸入食料品を置いてある店等があります。日本国内との値段等を比較しても面白いですよ。但し、働いている人達は一生懸命ですから邪魔にならないようにする事をお忘れなく。マーケットの道向かいにあるリバティプラザの地下にはスーパーマーケットがあります。ここは地元の中流クラス以上の方が買い物をする場所になっています。同じ建物の1階、2階は地元の人向けのショッピングセンターになっています。喫茶店の様な店もありますから一休みするのに良い場所です。

リバティプラザを出たら、R.A.DEMEL MAWATHA (道路名) をバンバラピティヤ方面に移動して下さい。道路の両側にスリランカの最先端の流行品を扱う店、スイス・中国・インド・韓国等のレストラン、洒落た文房具店、昔ながらの商店等が混在しています。

さて、バンバラピティヤに着いたらマジスティックプラ

ザに行ってみましょう。お腹が空いているようでしたら地下にあるフードコートに直行して下さい。スリランカ料理はもちろん各国の料理のブースがありますので、お好みの料理を買って中央のテーブルで食べる事ができます。

但し、各国風ではありますがスリランカ色が強い味付けなのでスリランカ料理を買わなくてもスリランカ風の味が楽しめます。世界的に有名なフライドチキンやハンバーガーのチェーン店も近所にあり、スリランカ独自のメニューもありますが、わざわざ食べなくても良いでしょう。

腹ごしらえが済んだら店内探検に出発しましょう。1階から3階まではスーパーマーケットやサリー屋さん等、何でもあります。紅茶などのお土産物を買った方には、お土産物屋もありますので旅の最終日にも便利な場所です。ミネラルウォーターやスナック菓子などもスーパーマーケットでまとめて買っておくと便利です。

マジスティックプラザを出たら左方向へ進んでください。広い道はゴールロードでコルピティヤ方面に向かって戻る事になります。この道はご自身で歩いた方が楽しいでしょう。たぶん、妙に日本語の上手な人が話しかけてくると思います。多いのは寄付金集めと称するおじさんです。身分証明書をみせてくれますが、何を証明しているのかわかりません。日本人の名前が書いてあるノートや、もらった名刺を見せて一生懸命勧誘してきます。相当にしつこいですが、無視しているうちには次の相手を探しに何処かに行ってしまうので相手にしないで下さい。

道路の両サイドには、商店、レストランがたくさんありますから冷やかしながら歩きましょう。スリランカの人達からジロジロ見られて落ち着かないと思いますが、慣れてしまえば平気です。ニッコリと微笑み返してあげれば相手の表情も緩みますよ。スリランカ各地を巡って、そろそろ日本食が恋しくなっている人には「さくら」と「もしもし」という店が道路から海側に少し入った所にあります。どちらの店もゴールロードに看板が出ていますから直ぐ判ります。

コルピティヤの交差点に着く頃には、夕方近いと思います。ここから車でホテルに直行するのも良いですが、ゴールロードをもう少し歩いてゴルフフェースホテルまで行きましょう。入り口付近にはこのホテルに宿泊した著名人の名前が掲示されています。昭和天皇の御名前や意外な方の名前を見つける事ができます。ロビーをぬけると中庭に面したテラス出ます。インド洋を見ながら、今日一日を思い出して、ビールで乾杯しませんか。お疲れ様でした。

必ず、地図を持参して道路名、地名を確認して行動してください。

私達は“^{そうこう}糟糠の妻”と言え、^{そうこう}「糠味噌女房」という言葉や、「長年連れ添った糠味噌臭い女房」、「糠味噌を漬けるのが上手な奥さん」のことを思い浮かべます。一見いかにももってもらいのですが、本当はどんな意味なのでしょう、改めて調べてみたいと思います。

まずは辞書から調べてみましょう。現代国語辞典(三省堂)には「いっしょに貧乏や苦勞をしてきた妻」とあり、中日辞典(小学館)には「^{zāokāngzhīqī}糟糠之妻」は“貧しい時代から苦勞を共にしてきた妻”とあります。因みにこれは四字成語として掲載されているのではなく、「^{zāokāng}糟糠”酒かすやヌカなど粗悪な食べ物(昔貧乏な人が飢えをしのぐのに用いた)”の項の引用例として掲載されています。

さて、出典です。「糟糠の妻」の出展は『後漢書』宋弘伝に述べられている「貧賤の知は忘るべからず、糟糠の妻は堂より下ろさず」から出ています。

後漢の世祖となった光武帝のもとには、その天下統一のあと、いわゆる《^{そうそう}鉄中錚々》(*)といわれる人物が数多く集まったといわれていますが、この話も光武帝に仕えた一人物の毅然たる態度を示すエピソードなのです。

光武帝は、自分の姉で未亡人であった湖陽公主が、かねてから大司空の職にある宋弘に意があることを知ったのですが、いかに光武といえども、宋弘に対してまともに姉を貰ってくれまいかとは言いだしかねました。そこで、次のように宋弘に話をしました。

「どうだろう。”貴くしては交わりを易(か)え、富みては妻を易う(地位が高くなったら付き合う相手も地位にふさわしいものに代え、富貴になったら妻も新しくめとる)”というが、これは人の情というものではないかな。」やんわりと光武の姉のことを匂わせられた宋弘は、しかし、はっきりとこう言上しました。

「いいえ、私は”貧賤の交わりは忘るべからず、糟糠の妻は堂より下さず(貧しく地位の低かったころの交友は忘れてはいけない、貧苦を共にした妻は家から出してはいけない)”と聞いていますし、私もそうだと思っています。」

その答えを聞いて光武帝も諦めるほかありませんでした。糟糠の妻は堂より下さずの部分の「糟糠」は、「かす」と「ぬか」のことで、ひどく粗末な食事のことです。貧しくて糟や糠のたぐいしか食べられずに^{かんなん}艱難をともしてきた妻は、たとえ後日処を得て富み栄えるようになっても、これを棄てやったり、粗略に扱ったりはしないということです。全体では「貧しかった時の友達は忘れてはならないし、酒かすやヌカを食べて苦勞を共にした妻は座敷から下げぬようにして大切に扱うべきだ。」という意味になります。

***多くのもののなかでとりわけ優れたものの意**

【私が調べた四字熟語 9】
糟糠の妻 (そうこうのつま)

三澤 統

〈注記〉

^{こうぶてい}光武帝：紀元前6～57年 在位25～57年)は後漢王朝の創始者、初代皇帝。姓は劉。諱は秀。字は^{ぶんしゆく}文叔。光武帝は諡号で、よく前業(=前漢)を継ぐ(=中興)を光、よく禍乱を定めるを武ということから、諡された。廟号は世祖。

^{おうもう}王莽による前漢王朝^{さんだつ}篡奪後の^{せきび}赤眉の乱の混^{るう}乱を統一し、後漢王朝を建てた。「隴を得て蜀を望む」「志有る者は事竟に成る」「柔よく剛を制す」(『黄石公記』(=『三略』)の引用)などの言葉を残したといわれる。(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)より転載)

^{せきび}赤眉の乱：王莽の治世に反発する農民反乱軍の一派による内乱。この反乱軍が敵と味方の区別のために眉を染料で赤く塗ったことにより眉赤の乱と呼ばれた。

^{いみな}諱：忌み名：貴人の死後尊んで送る称号おくりな

廟号：東アジアで皇帝や王が死亡した後に、先祖を祭るための廟に載せられる称号。

遅まきながら、建設担当の私、鈴木晋作は村に到着しました。

久しぶりの村の人々との再会は、嬉しいものです。もちろん、建設途中の建物にもしばらく顔を合わせていませんでした。

「何しろ長く来ないもんだから、スズキは、こんな遠いところには、もうこないかと思ったよ...」

「稲刈りも終わって、米も運んだら、正月までは何もやることないからまた手伝うよ」

と、多くの人は笑顔で迎えてくれます。各方面私の到着の遅延によって迷惑をかけて申し訳ありませんでしたが、村レベルでは、問題なさそうです。

米の収穫が終わった人は、サトウキビを搾って、糖蜜を作り、鍛冶仕事をして農具を直したり、実際にとても「ひま=空」ということは、無さそうですが。

このシェンクワン県では、収穫時期で、幹線道路からは、山積みのとうもろこしの芯、稲藁がいたるところで見られました。村でも、ちょうど米の最後の収穫。村人数人(田が近い人同士)で中国製の青いトラックを借り切って、荷台に米袋を山盛りにして、山のガタガタ道をのろのろと村に運んでいました。

到着の翌日には、建設作業を開始しました。しかし、この建設の主要な人物の幾人かは、わたしが村に着いたちょうど前日に、年に1回のピクニック(?)でいくつも山を越え、遠くの川に魚釣りに行ったところでした。彼らも数日で帰ってくる(持参した米を食べ終わったら...)と期待して、残った人々と始めたのでした。

▶ 建設再開

作業再開に当たって、建物の点検をしました。雨季を経て、半年も建物と材木、石を置きっぱなしで下から、施錠をしたと言っても、建物状態に対して、多少、不安はありました。安井さんからも、「お化け屋敷みたいだから、早く来てね」と言われていました。

モンの子がこの柱は「固い」と言って、なたで木の固さを試したり、オンドル床の平らな石を重ねて遊ぶというような“いたずら”はありますが、特に問題はないようです。それも、近所の人、大工工事をした人たちが、建物と材木の様子を気にかけてくれているおかげです。

この建物は、材料の制限から、構造に併せ柱、合成梁など、構法に手間のかかる、難しい方法を取っています。正確な構造計算をしているわけではありません(計算してもそれ通りの材料は手に入れない)が、直接山から木を倒して、大オガで丸太を裂いている人達の感覚を信頼して、作っては、直し、身を持って(荷重をかけたり)試して構造を組み上げています。小さいながらも、凛と存在感があるのは、手を掛けて作っているからでしょう。それで、村の人の多くは理解の上、参加または、見守ってくれているのでしょう。



地貫に座って語らうチィばあちゃんと安井さん

普段の山の「シゴト」でなく、村の中での「カセギ」として拘束する限りは、対価を支払いますが、特別難しい作業を除いては、余り特定の人に集中させると村の中での均衡を崩しかねません。また、その均衡の中での活動に先行した、「自力建設」ということを再認識しなければなりません。

多くの人は、茅葺を「時代遅れ」「腐朽する」といっては、セメント成型波板、金属波板を進めます。それには、ここでの長く使ってきた歴史(信頼性と生産性)がありません。しかも、隣国のセメント瓦、セメント系波板には、アスベスト等の有害物質が含まれている可能性が高いです。今年は、このまま茅葺ですが、村の人とも再度検討しなければいけません。何はともあれ、モンの人に関心を寄せ、この空間を大事にしたいということが互いに伝わりつつあることを感じる始めの2週間でした。

▶ パビリオン(仮設的な空間)としての小屋からの出発

この農繁期の半年間は、建設はお休みでしたから、柱と柱の間をごさ等で包み、板を打ち付けて、建物を囲んでいました。それでも、子ども達は隙間や、囲いの上から忍び込んで遊んでいたようです。中には、一晩家出をして、この上屋の上で夜を明かした子もいると聞きました。

作業再開の為に、囲いを外すと、まさに「子どもの遊び小屋」と化し子ども達が柱の周りをくるくる回ったり、オンドルのグネグネした煙道を這いずり回ったり、「入って、遊ばないでね」というのは、無意味だとすぐに分かりました。又、畑帰りの人がまだ壁のない地貫(柱を繋ぐ床下の横架材)の上に腰を下ろしたり(写真のように)、壁で塞ぐのがもったいないようです。

まだ仮設的なパビリオンですが、建物が存在することと、安井さんと私がいることで、ここが図書館になるということが当たり前のように周知されています。このパビリオンの屋根根に、床、壁、窓、家具が加わり、活動も空間(建物)作りから場所(中身のある活動)作りに重心を移していきます。

ともあれ、去年は、着工するまでに多大な時間がかかったことを考えるとなんと迅速なことかと感じられます。



壁の無いパビリオンは子どもの絶好の遊び場

かまどは、砂利と砂と粘土が混じった土を丸太で叩きしめて作る(版築)。



オンドル床のチームがかまどを作り、大工工事のチームが窓の枠を入れる。



◀かまどができて、床石も設置して、オンドルに火を入れた。
煙が、見る見る煙道に吸い込まれ、排気口(蛇のオシリ)から出始めた。床石が温まることも確認。
これから乾燥後に隙間を丁寧に埋めて、何度も土を塗って(6, 7cm)一度温まった床から熱が逃げないように紙を貼る。全体が温まる時間がまだ読めないし、できあがっても何度か改良を加えないといけないだろう。



木を割く二人。かなり大変な仕事。まっすぐに引くのもコツがいる。

●これから=モンの正月までとその後

12月から霧が深くなり、寒くなりました。

霧と言っても霧雨のように、柱、枠に滴が付くほど深いものです。実際に、今回も一度入れた引き戸の枠(広葉樹)を取り外し、改めて水切りの溝を掘り直しました。

モンの正月(12月下旬)までは、このまま作業を続けます。

床板を設置し、窓、扉の枠をいれ、それから土壁の下地の竹木舞を編みます。乾燥したオンドルの床にも盛り土をします。

正月を数日過ごしてから、又作業開始です。

大変な窓、扉作りがはじまります。そして家具作り。新年1月の終わりには、中で活動が始められると良いです。

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

願わくば不老不死よと屠蘇の酒

ろう梅や茶人迎ふる今朝の庭

xīnnián yù qǐqiú
新年欲祈求
chángshēngbùlǎo fú yǒngjiǔ
长生不老福永久
chàngyǐn tú sū jiǔ
畅饮屠苏酒



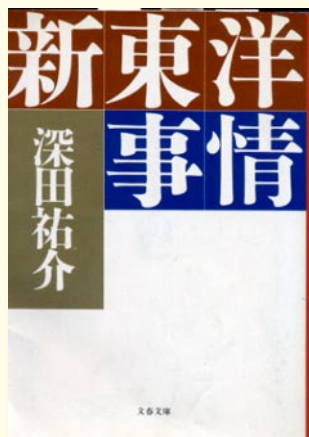
lǎo méi tǔ qīng fēn
老梅吐清芬
yíngjiē yǎ shì dà jià lín
迎接雅士大驾临
xiǎo tíng jīn cháo chūn
小庭今朝春

季语：屠苏酒、新年。

此句为作者于新年在自家亲属聚会时所作、表现了众人对美好未来的憧憬。

季语：老梅、新年。

新年来了、亲朋好友互相登门致贺。作者家中要有文人墨客来访、自然喜不自禁。早上起来、发现庭院中的老梅绽放吐芬、犹如有意迎接贵客似的、更是兴奋不已。看来、真正的春天已在清晨先贵客一步登临庭院了。



20年前に刊行されたので、タイトルの「新」はすでに無理があるかもしれない。けれど今のアジアに通じるものはたくさんあって、基本的なことは変わっていないのでは。書かれた国は韓国、台湾、中国、フィリピン、タイ、ブルネイなど多岐にわたるが、やっぱり断

トツでおもしろいのは中国！なんでも旅慣れた人たちは「中国だけが外国で、おもしろい」と語るのだとか。

中国のネタが豊富なのは、日本人の中国への関心が強いという側面もあるのだろう。漢詩に感銘を受け中国思想を熱心に学んだ「中国大好き爺さん」な日本人には特に要注意だ。偽物の掛け軸を高値で買い、乞食に大金を渡すという問題行為が中国人に利用されている。かくいう二十代後半の私も中国人に日本の千円札を渡して、中国通の同行者にみっちり叱られた経歴を持っている。大学で中国文学を専攻し、憧れを抱いた典型的「中国大好き爺さん」なのだ。

旅行で来て気持ちよく帰る私はさておき、しばらく滞在する人たちは夢打ち砕かれて中国に裏切られた気持ちにさせられてしまう。結局「日本人は中国について勝手な幻想を抱き、勝手に挫折してきた」と著者はあっさり分析する。どちらかといえば、中国に無理を押し付けているのは日本人で、十億の人口をもつ中国、すさまじい生存競争のなかで「仁」だ「義」だと言っているのは伯夷叔齊^(注)のごとく、あっけなく死んでしまう。日本のぬるい常識では生き抜けない厳しさのなかで、彼らには求められているものは生きるしたたかさや遅しさでしかない。だから日本の中華街で中国人ウェイトレスの「ありえない」対応に嫌悪を感じる反面、中国で彼らの生き様に触れると圧倒されて生きる力をもらったような気になるのだ。

昨今は漢文を学校で教えなくなっていると聞く。漢文のリズムに親しんだり、漢詩の芸の細かさに触れたり、迫力満点の史記の文章を読んだりという機会が減れば「中国大好き爺さん」も減るのだろう。それもなんだかとても寂しい。

(真中智子)

注：継ぐはずの王位に執着せず、潔く国を去った孤竹国(殷代)の王子、伯夷・叔齊兄弟は、結局、己たちの信念を曲げることなく山に籠もり餓死する(史記)。

日中文化交流市民サークル'わんりい'の皆様

Wish You All the Best in 2007

World Nature Inheritance Four Girls Mountains Nature Reserve

Kenzo Okawa

入場料：無料

中国新春展

～ お正月をめぐる民間工芸 ～

於：日中友好会館美術館

東京都文京区後楽1-5-3

2007年1月12日(金)～1月28日(日)

10:00～17:00 休館日：なし

主催：(財)日中友好会館、中国美術館

後援：中華人民共和国駐日本国大使館/
(社)日中友好協会/外

問合せ：(財)日中友好会館 文化事業部

TEL 03-3815-5085

ホームページ：<http://www.jcfc.or.jp>

e-mail：bunka@jcfc.or.jp

【中国新春展特別企画】

中国美術館員によるギャラリートークと、麵人形細工師による制作実演を行います。(麵人形細工師：馮海瑞)



● 馮海瑞

1935年河北省生まれ。幼い頃から麵人形細工に親しむ。本展に出展する麵人形は、全て彼の作品。

● ギャラリートーク・制作実演

1月12日(金) 10:30～11:30

1月13日(土) 14:00～15:00

※申し込み不要



◀ 剪紙売り(麵人形)

22×26×12(cm)

年の暮れは、正月のお飾りとして家の窓や門等に貼られる剪紙など、正月用品を扱う歳の市が賑わいをみせる。



◀ 年年有余(年画、一部)

39×53(cm)

魚の発音(yu)は“余”と同音(yu)です。中国の家庭では「今年も富や幸福が有り余りますように」という願いを込め、お正月に魚を食べる。

▶ 髪飾り売り(麵人形)

22×26×12(cm)

年末、歳の市で新しい服や髪飾りを買ってそろえ、新年に備える。



▶ 鳴き犬(泥玩具)

8×7×4(cm)

人形の胴部分は空洞で、胴の真ん中は紙でつながってる。胴の前後を伸び縮みさせて、中の空気を押し出すと「鳴き」く。



◀ のぞきからくり(泥人形)

10×6×5(cm)

お正月の縁日などで見られるのぞきからくり。のぞき穴をのぞくと、語り手が語る口上と共に、次々と絵が切り替わる。



◀ 豚枕(布人形)

12×23×14(cm)

中国の十二支では、亥(猪)は豚です。この豚枕は、子供用の枕として、または、玩具として使われます。

※麵人形とは、小麦粉を主な材料として作られた人形細工のこと。

縁起をかつぎ、おめでたい物を好む点では、中国の人々も日本人と変わらない。

展覧会では中国美術館が収蔵する麵人形・泥人形・玩具などの民間工芸品の中からお正月を題材にした、職人技が光る作品約90点を、年越しの街角風景・お正月の風物・新年を寿ぐ縁起物の3つのテーマに分けて展示する。また、会場には春聯(新年に門や部屋に貼るめでたい文句の書かれたもの)や灯籠などのお正月飾りを飾り、中国の熱気あふれるお正月気分を体感したい。

TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル内モンゴル公演凱旋コンサート

内モンゴルの首府フフホト市での、日本人による初めての馬頭琴アンサンブル公演は大成功でした！この度、内モンゴルでの公演を記念して凱旋コンサートをいたします。皆様のご支援をよろしくお願いします。

2007年1月14日(日) 18:00開演 於：野方区民ホール

前売り1500円/当日2000円(全席自由)

主催：TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル

▶ お申込＆お問合せ：TEL/FAX：042-498-4820(永瀬)

▶ 携帯：090-1549-2660(永瀬) ▶ E-mail: manba@hotmail.co.jp



‘わんりい’1月定例会：1月22日(月) 於：田井宅

◆ 毎年、2月はおたよりの発行をお休みしています。よろしくご了承下さい。



今年も美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている!!
!!! 'わんりい' 新年会へようこそ !!!

於：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2007年2月4日(日) 11:00～14:00

- 定員：40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 ●申込：メールかTEL/FAXで下記へ。



Email: wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX: 042-734-5100

- 新年会メニュー：ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」・ビンゴ・お笑い福引
- 何媛媛さんによる中国琴の特別演奏
- 「中国語で歌おう!会」の今年の歌は「北国の春」



「中国語で歌おう!会」は1月26日、まちだ中央公民館・ホールで中国語「北国の春」を練習します。体験無料です。(詳細、「わんりい」新年号1ページ)是非、一緒に練習を!

＜四姑娘山フラワーウォッチングと登山の旅＞

----- 参加者募集 -----

一昨年と昨年、わんりい会員の方々と関係者が四姑娘山を訪れ、わんりい紙上で美しい花々や景色の写真や旅の報告を楽しませていただきました。

今年も下記の日程で四姑娘山フラワーウォッチングと登山を楽しむ旅をしようとおもいます。

現地の旅の手配と案内はこれまで同様、四姑娘山自然保護管理局の大川健三さんがお引き受けくださいます。

●期間：7月25日～8月5日

●費用について：

◇現地滞在費

- ・フラワーウォッチング組：12.5万円
- ・大姑娘山登山組：13.5万円

*費用は参加者を8人として計算したものです。10人を超えた場合は上記の値段よりも若干安くなります。

◇飛行機代：昨年は12万円でしたが今年の夏の値段は3月にならないと確定しません。

従いまして、総費用は現地滞在費+航空運賃12万円+1万円ぐらいとお考えください。3月の飛行機の予約の時点で確定します。

*コースの途中でテントに3泊しますので寝袋が必要になります。

*途中、大姑娘山登山をするグループと花を見るグループとに別れます。

*四姑娘山についての詳しい情報は「わんりい」HP「チベット人信仰の山・四姑娘山」をご覧ください。

◇旅の内容の問合せ：岩田温子

e-mail: Atsukoiwata@aol.com

Tel/Fax: 042-736-6642

3人のソプラノとテノールによるガラコンサート

----- 楽しいオペラ解説付き -----

オペラ「椿姫」から“乾杯の歌”/オペラ「ランメルモールのルチア」から“狂乱の場”/オペラ「蝶々夫人」から“愛の二重唱” 他

出演：下原千恵子 持木弘 光岡暁恵 廣田美穂 宮下真奈美

2007年1月16日(火) 19:00開演(18:30開場)

於：ラゾーナ川崎プラザソル(川崎駅西口ラゾーナ川崎プラザ5F)

前売り：3000円(当日：3500円)

主催：NPO法人市民文化パートナーシップ川崎

申込&問合せ：044-874-8501 E-mail: info@plazasol.jp

魅惑の板胡 - 沈誠

中国国宝楽団2003日本公演の若手メンバーとして

板胡の音色で魅了の沈誠、待望の再来日!

2007年2月4日(日) 14:00開演(13:30開場)

於：HAKUJYUI HALL

代々木公園駅(千代田線)/代々木八幡(小田急線)下車徒歩5分

前売 5500円 当日 6000円

企画・制作・主催：ラサ企画

予約/問合せ：TEL/FAX 03-5748-3040

E-mail lasanon@db3.so-net.ne.jp

ガーダ - パレスチナの詩

大地 自由 平和 夢・歌うことが希望をつなぐ

*上映後、古居みずえ監督のトークあります

2007年1月13日(土) 14:00(開場13:30)

於：町田市民フォーラム3F ホール

原町田4-9-8 TEL042-723-2888

一般：1300円(当日1500円)/学生：1000円(当日1200円)

●久美同本店でも購入出来ます

主催：町田で「ガーダ」にであう開・STEP by STEP 平和